

古代ローマ政治経済下のパレスチナ

バシル・ムーア

序論

イエスがそこに生まれ、生き、死んだ時代、パレスチナはローマ帝国の一部であった。この背景事実を無視しては、イエスの歴史的研究をすることはできない。それは、たんにそこを母体としてイエスの活動があったからというばかりでなく、より重要なことは帝国領であったという事実そのものが、そこに生きとし生けるもの、権力の行使、紛争、イエスを信奉した人たちの希望、恐怖、精神の傷と願望にふかく影響をあたえるような構造的なものだったからである。

ローマ帝国の支配がパレスチナのユダヤ人にあたえた影響に注目しなければならない理由は何か？ 端的にいえば、われわれの知りうるイエスの行動や言説は、ほとんどすべて二番煎じか三番煎じ、いな四番煎じの間接的なものだからだ。われわれの知るかぎりイエスは、後世のためにみずからの教えや行動を本に記述して残すということをしなかった。われわれは現代の、またほとんど現代の信者と解釈者をとおして彼について聞かされるのである。そして、古今を問わず解釈者たちはみな、自分にとって都合のいいことだけを聞き、みずからが重要だとみなす言葉や行動を重要なものとしてとりあげる。したがって、解釈者たちの口をとおして知らされてきたイエスの生涯や教えに含まれている偏向について、最大の認識をはらっておく必要があるのである。

だが、もっと重要なことは、たいていの場合リーダーが運動をつくるのではなく、運動がリーダーをうむという社会学的事実である。われわれはある運動について語るとき、おうおうにして重要な指導者のカリスマ性や政策にポイントをおいて説明するという誤りをおかす。実際は、すでに存在している社会の要求や動きに形と方向性をあたえることのできる人がリーダーとなる場合が多い。だから、たとえばレーガン大統領が名声をはくしたのは、保守的でマネタリストの、そして反福祉で熱心な反共傾向を、彼が、アメリカ社会につくりだしたからではない。彼がやったのは、そうした傾向をリーダーシップ維持のために利用し、それらに政治的な形と方向をあたえたことである。支持者たちの明確な要求や問題に語りかけられない人は、たとえ大きなカリスマ性を持っていたとしても重要な運動のリーダーにはけっしてなれない。そういう人達は結局失敗し、歴史から消えてゆく。

この一般的認識に、イエスがまさにイエスの運動の中心的指導人物になったという疑い

ない事実を重ねあわせると、次のような結論がみちびかれる。イエスは、その支持者たちが求めていたものをつかんだに違いない、と。したがってもし、イエスが作りだした運動をつうじて、歴史におけるイエスを解釈しようとするなら、彼の支持者たちをとりまいていた状況と、そこでうみだされた要求、願望について理解しなければならない。なぜなら、そうした要求と願望に応えることで、イエスの際立った運動が創出されたからである。

しかし、ユダヤ人の歴史とこの時期の社会グループについて直接に論じることがこのエッセイの主眼ではない。それは別のエッセイ「福音書の政治的背景」において述べるつもりだ。ここでは、もろもろの歴史的出来事がなぜ、またあのような形態をとって発生したのか、その背景を探求してみたい。

そのためには、パレスチナからローマ帝国へと目を向けなければならない。そしてローマ帝国の観察において、帝国の政治経済自体が実際どのように機能していたかをあきらかにすべくこころみる。もっと簡単にいえば、われわれは次のような点を問題にする。金持ちはいかに作りだされ、貧乏人はいかに作りだされたか？他者に対する支配力はいかに獲得され、そしていかにして失われたか？富者と貧者の間の関係は何だったのか？

これらの点を問題にするとき、われわれはローマ帝国には、きわめて明瞭で、管理され組織されたシステムがあったとの前提にたっている。人々の行動がはっきりと予測可能な組織化されたシステムの存在を前提にしなければ、諸個人の社会行動は基本的に説明不可能である。たとえば、古代ローマ人が現代社会の失業だとか株式市場への巨額の投資や巧妙な税金逃れ策といった現象を理解しようとするれば、まず現代資本主義の構造を把握しようとするだろう。同様に、イギリスやオーストラリアの政治における二大政党制の意味を理解するためには、資本主義の社会的側面の把握につとめようとするだろう。

つまりここで問題にするのは、古代ローマ帝国の、さらにはパレスチナなど植民地へと拡大された社会的、政治的、経済的システムの内容である。

1, ローマ経済—一つ概念モデル

20世紀の学徒が、古代ローマ帝国の政治経済を学ぼうとする際に大きな問題となるのは、経済システムに関するわれわれの思考が常に資本主義的モデルの先入観に占められていることである。資本主義の基底にしみこんだ原理とイデオロギーにもとづかない経済行動は、われわれにはほとんど想像できない。

だからこそ、また、ローマ帝国は決して資本主義経済ではなかったがゆえに、資本主義

が立脚するいくつかの基本イデオロギーと原理を把握しておかねばならない。つまり、これらのイデオロギーと原理および活動が、古代ローマでは機能していなかったということを逆説的に強調するために大切なのである。

資本主義の一つの基本イデオロギーは、経済が諸個人に関知せず、資本主義の経済ゲームのなかでは、みんなが平等な競争相手だということである。ゲームの規則は紳士協定などではなくて、実際は冷酷で不変的な法則である。この競争戦のなかで、もっとも力のある者が生き残り、その力は生き残ることで証明される。経済法則の前では、生まれも、持っている人脈も、なんの保証にもならない。

資本主義競争での成功に対する主たる「報酬」の一つは、他者に対する支配、なかでも経済的支配の手段（たとえば労働者を雇い入れる）をあたえられることである。この経済的支配は、社会的、政治的影響力（権力でないにしても）へと、比較的容易に転化する。資本とその法則が非人格的なものだからこそ、無名な人々が富と権力の地位に昇りつめることが可能となる。

このシステムは、生産企業への投資原理において機能すると説明される。生産手段の取得の結果、企業家は生産物を取得するにいたる。企業家は、その生産物を貯蔵したり消費することによってではなく、売って利潤をあげることで富を得る。利潤こそが、資本主義経済を支える内的論理である。

きわめて単純化していえば、生産コストと販売価格の差を最大化することで利潤は得られる。利潤を最大化するためには、生産コストをできるだけおさえ、販売価格をできるだけ高くすることが必須となり、生産コスト縮減のために資本主義は、限りない効率化へと向かう。効率化には技術上の効率化とコストにおけるそれがある。技術上の効率化は、生産性向上を基本目的とした不断の技術機械装置の導入をつうじて実現される。コストの効率化達成は、主にマルクスが定義した「労働力」をつうじておこなわれる。賃金労働者は、資本主義において技術革命と同等におかれるべき、概念上の革命であった。資本主義の企業家は、人そのものを買ったり、雇ったりするのではない。馬や牛と同じく、人間を丸ごと維持するのは高くつく。食料、家、衣服をあたえねばならず、訓練したりご機嫌をとったりもしなければならないからだ。企業家が求めるのは抽象的な労働、つまり働く能力である。労働者が企業家との契約で、賃金の対価として与えるのは、この抽象的な能力であり技術である。労働者は与えられた賃金によってみずからの食料、住居、衣服などを得る。

販売価格は、アダム・スミスが需要と供給の相互作用とよんだ市場諸力の働きによって最大化される。資本主義において需要が最大化するうえでは、労働者がみずからの労働生産物の購買者の立場におかれる、という事実も寄与する。つまり、労働者はみずからがつ

くった商品を、市場において企業家から買わねばならない。労働者を市場の主要な要素に転化するという点は、少なくともその規模と量において、資本主義において初めて見られた特徴である。

相対的に希少な商品の購買のため、労働力の売り込み競争をする労働者は、構造的には価格の上昇に力をかしている。したがって、労働者はあきらかに利潤の取得に貢献しているのである。

この程度のひどく不十分な説明でも、次の点をあきらかにするにはたりるだろう。資本主義経済システムは利潤という動機に支配されており、利潤は生産への資本の投下と、相互依存的な諸市場の巨大な集合体に参加することで実現される、ということである。

古代ローマの経済はあらゆる点でこれとはちがっているから、考えを整理するためにわれわれは、資本主義とはことなつた概念モデルを定式化する必要がある。

まず第一に、資本主義と対照的に古代ローマの経済は、はっきりと個人を重視していた。だがそれは平等主義的イデオロギーを持っていたということではない。ローマ社会はある意味で、インドの伝統的カースト制のように強固な階層組織であった。社会は階層的な序列と地位の枠組みのうえに成り立っており、それらの序列は不文律であった。プラトンは別にしても、古代世界の誰もこれとはちがった構造を思いつくことはできなかった。社会における身分は、すべてではないがたいてい出生によって決まり、その身分に応じてすべての特権や義務がもたらされた。身分が、人の経済活動をひろく規定する。身分が、社会的、政治的権力を順序だててもたらし、それがひるがえって富の取得を容易にした。資本主義社会で富が権力をうみだすなら、ローマでは身分に付属した権力が、富をつくりだすのである。

社会組織の基礎としての身分のもつ、固有で自然な公正さに対し、このような強固な心理的信頼があったということは、後にみるように古代ローマ人たちがみずからの身分の維持、誇示、上昇のために大きなエネルギーを費やしたことを示している。これは主に、ぜいたくではでな消費のために物財を取得したり、そして、少なくとも「上流階級」＝エリートの場合は、彼らの身分に照応した義務をはたすことを意味する。上流階級、ないしは高い地位を求める人々が、借金までして身分にあった土地、不動産、邸宅を買ったり、あるいは道路建設や娯楽の提供といった公的活動をするのは決してめずらしいことではなかった。これらは利潤のための生産企業への投資ではなく、身分への投資なのである。身分がまずあって、そこから富がうみだされるのであり、その逆ではないのだから、それは当時の社会ではもっとも賢明な投資の形態であった。

身分がいかに富をもたらしたかを、以下でもう少し詳しく立ち入ってみたい。ここでは、

一般論として身分は、土地の所有権と、税金および兵役からの免除権を意味するものとして機能したという点を押さえておけばよい。おかげで高身分者たちはまったく自由に土地収獲物を取得でき、それによって身分上の義務をはたす能力を最大限に拡大できたのである。

このしくみのもとでは、税金と兵役のすべての負担は階層制のなかの中級および下級身分のうえにかぶせられた。

ローマ帝国経済はこうした構造であったために、そこでは利潤ではなく「取得」そのものが、主要な活動原理であり、だから巨大な相互依存市場形成の必要もなかった。必要なのは供給源の確保であった。そして、供給源の確保と拡大のためには生産効率の向上ではなく「取得」と「拡大」が、つまり供給の効率化でなく供給源の量的拡大が必要だった。こうしたシステムのなかでは、職人、農民、奴隷などの下層身分の人達は、市場諸力によって企業家の利潤を最大化するような、資本主義の消費者と同じ意味での消費者とはいえない。金持ちたちによる身分におうじた公的サービスの一環として、実際に困窮者は金持ちから物財を受け取っていたのである。資本主義の概念では、エリートたちはそうは見えてこなかったにせよ、貧困層は供給の水はけ口であった。

以上のことは、古代ローマ帝国に人々が物を買ったり売ったりするような市場がなかったことを意味しない。市場はあった。が、ローマ帝国は市場経済の基礎の上に築かれた社会ではなく、これらの市場は本質的に副次的な現象だった。フィンレイが記しているように、都市の成長を、製造業や市場交換の中心の成立によるものとする古代の著述家はいないのである。(注1)

下層階級が上層階級のために労働をした事実ももちろんあるが、賃金労働者という階級は存在しなかった。ほとんどが熟練、非熟練の奴隷、小作農、強制労働者であり、または短期間の契約労働者であった。

古代ローマの経済システムとは、階層的な身分序列の枠組みのうえに形成され、その身分は「取得」をつうじた搾取という基本的過程により維持され、強化される社会であった。この頭ならしの序説で、以上のことが理解されればよいと思う。

2. 身分と経済活動-上層階級の場合

われわれが古代ローマ社会の身分と呼ぶものは、ローマ人自身が「階級」と呼んでいたものである。階級とは、法で定義された住民のなかの集団で、政治、軍事、法律、経済、

結婚など、一つないしそれ以上の分野で公的な特権と禁止条項、ならびに他階級に対する階層的な位置関係を持っていた。階級は、理論的には世襲制である。ローマのもっとも初期のころ、貴族と平民の2階級に分かれていたときはそうだった。だが、ローマ帝国がその領土と力を拡大し始めたころ、この2階級は法律、宗教、伝統により強固に隔てられていたにもかかわらず、その区分の実際の重要性を失われていった。紀元前366年以降、文学のうで確認される貴族家の数は、21をこえない。これら貴族ファミリーたちの地位は、ある種の聖職者としての特権にまで大きく低下し、護民官の被選挙権まで失うにいたった。

貴族階級が何世紀にわたり存在し続ける一方で、紀元前2世紀までには、元老院議員階級が最高位の階級になっていた。年月がすぎるうちには、元老院の多数派は平民に占められるようになった。法律上は、元老院議員の資格は世襲ではなかったが、実際には出生が元老院階級への手段となっていた。2世紀末までには、元老院議員以外で、最低40万セステルティウス以上の財産をもつすべての人は、第2身分である騎士階級とみなされるようになっていた。1800人から2400人の選ばれた中枢エリートに対し「国家の騎馬」を与える古い行事が、栄誉あふれる形で続けられてはいたものの、この時までには、すでに騎士という古い呼び名は文字どおりには使われなくなっていた。いまや階級のなかの多数派となった他の騎士階級にとってさえ、古めかしいその称号は「高身分と、課税のための財産調査、古式ゆかしい伝統と装飾的なイメージが付随」する純粹に心理社会的な価値があったのである。(注3)

ローマがこの時代、帝国として拡張していくにつれ、階級の伝統はそれ自身では帝国の政治的、行政的統合の基礎としては不十分であったとしても、より深く強化された。そして、階層制を支配するのは元老院全体ではなく、徐々にかつ確実に中枢の「ノービレース＝新貴族」と呼ばれるエリート集団になっていった。この新貴族は法的な地位ではなかったが、事実上、元老院のなかの現在または過去の執政官の一族にかぎられた(注4)。元老院中のこの中枢部分が、ローマおよびその帰属州のすべての主要な役人になっていた。

言うまでもないだろうが、元老院と騎士階級になれるのは、ローマ市民の階級に限定されていた。そして、ローマ市民権は、厳格な意味で一つの階級を意味し、特に「異邦人」が大量にローマに移住してからは、この権利はあらゆる法律で用心深く守られた。紀元14年に、ローマ帝国人口調査で帝国全体の人口が5千万人から6千万人と推定されたとき、ローマ市民権保有者はわずか5百万人(4,937,000人)にすぎず、そのほとんどがイタリアに居住していた。

階級としてのローマ市民権がより明確に定義され、確立されてくると、それは基軸的階

級となり、非ローマ市民を搾取する第一の手段となった。多くの非ローマ市民は商売、手工業、金貸し業を活発にいとみ、大金持ちになったものさえいたのに、かれらは土地も財産も所有することができなかった（ときおり、土地の所有権が非ローマ市民にも拡大されることがあったが）。ローマ市民が、主たる金貸し業者である非ローマ市民に金を借りるのは容易ではなかった。なぜなら、非ローマ市民には土地所有が許されていないがゆえに、債務に対する抵当として土地を提供することができなかったからだ。しかしローマ市民たちは、土地所有を規制する諸法規のおかげで比較的容易に財産を収奪し、広大な土地を集積していった。

ローマ市民たちの階級は、どんな種類の経済活動に従事していたのか？経済システムのなかでのかれらの役割は何だったのか？

上層階級の基本的財産は、土地にあった。土地所有者である彼らは、土地を小作人に貸与している場合をのぞき、所領管財人をつうじて農産物の販売にかかわっていた。だが、わずかの例外をのぞき、商売をとおしての蓄財にかかわっていたわけではない。ルグドゥヌム（現在のリヨン）（注5）、アルル（注6）、マグダレンズバーグ（属州ノリクム）（注7）など、交易の中心だった大都市に関する調査によると、これらの都市の富裕な商人たちは、騎士階級でも元老院階級でもなかったと結論づけられる。かれらは自由民（解放奴隷）と外国人たちだった。ルグドゥヌムでは、みずからを帝国貴族どころかローマ市民となれる富裕商人さえ一人もいなかった。このことは、キケロをつうじて知られるとおり（注8）、気品高いローマの高身分者に交易と商売は似つかわしくないものだったことを証明している。これら上層階級のローマ人たちが、基本的に農産物の販売者でないなら、かれらは農民でもないということになる。かれらは都市に住む「不労農場主」で、多くの場合自分の土地に行ったこともなく、およその場所を知っているだけであった。（注9）これらの土地財産のおかげで、上層階級は所得確保のための職業への従事を免除され、経済的な不安定さから解放されることとなり、また、遊興とはでな消費生活が保証されたのである。

プルタークの「ペリクレス」に、ペリクレスの息子、娘と、頭のよい奴隷エバンゲラスの間のいざこざを描いた啓発的な一節がある（注10）。プルタークは読者に、エバンゲラスがいかに世帯管理にたけていたかということ、家計のためにその年の収穫物を市場で売ったこと、正確な帳簿をつけたこと、そのおかげで家計がいかにうるおったかということを熱心に説いている。ところが息子と娘の方は、「恵まれた環境の高貴な一家なのに、ちっとも裕福でない」といって、エバンゲラスに腹を立てるのだった。

上層階級にとって土地所有は、利潤のためではなく、はでな消費と地位にふさわしく富を誇示するためのものだった。端的に言って、生産ではなく取得に一般の関心があったの

である。

だが問題はこれで終わりではない。もし、上層階級が大消費者であるなら、かれらはまた大出費者でもある。その出費は主として二つの基本的な形をとった。一つは土地の購入である（戦争と徴用による場合を除いて）。屋敷と土地を買うために、新貴族たちが専門の金貸し業者と、同僚のなかの裕福な部分から大金を借りていたことが知られている。たとえばキケロは、パレスチナの豪華な屋敷をクラススから買うために、専門の金貸し業者から350万セステルティウスを6%の利子で借りている（注11）。さらに後日、シーザーから100万セステルティウスを借り、そのおかげで彼がその支持をシーザーからポンペイに変えたときに苦勞することになった（注12）。のちにシーザーが完全に支配権を握ったとき、キケロみずからシーザーの書記官に金を貸している。

二つめの出費の形態は、ギリシャ語の *leitourgia* という古い言葉で、われわれの教会用語「教会礼拝式（聖餐式）」はここから来た。公的行事である「教会礼拝式」は金がかかったが、貧者の困窮を救うための支出という意味の慈善事業ではなかった。実際、ローマ以外では王室の国庫で人々を食べさせていたが、ローマやギリシャの都市で、貧困者の状態改善の方策をとっていた例はない。貧困者は借金を返せなくなると、法により容赦のない責めをうけていた。

教会礼拝式というのは、高身分の者たちを拡大した意味での家長とみなすところから出てきた。このばあいの「家族」とは自分たちの直接の家族のみならず、ひろくローマ市民のコミュニティを含む。拡大した家族の家長としての彼らは、宗教、娯楽、劇場、競馬、公共建物（寺院、市場、浴場、劇場など）の建設、道路などの欲求の充足と、帝国軍隊への兵役提供することで、みずからの能力を判定された。この時代の文学作品は、決して得にはならないそうした公共の活動に、いかにかれらが大金を費やしたかの自慢話でいっぱいである。たいてい、こうした自慢話で、保持する身分がいかにかれらに自分に適したものを自己弁護しているのである。

この時代、公的な教会礼拝式への支出が、政治的支持を獲得し、高身分の地位を保持するための主たる方策であった。そして高位の地位に在任することは、みずからの損失埋め合わせの足がかりとなった。

身分と政治的支持確保の闘いのなかで、上層階級は経済的に困難な状況にあった。基礎となる富は土地だったが、その利用権を持ちながら、上層階級はいつも慢性的な現金不足に直面していた。現金は、選挙での買収、ぜいたくな生活、お祭り騒ぎの公営競技、そして建築とかいろんな見栄のために必要だった。その結果、複雑な債務と保証のネットワー

クが政治活動の一部となった。新貴族のなかの非専門の金貸しから借金をすることで政治的義務が生まれ、それは本人が属州の知事になるまで継続する。だから知事になってからの属州内での強要や、富の増殖はどうしても必要なことだった。成功と失敗の確率は異様に高かったから、これら上層階級のあいだには、いつも大きな緊張があった。成功の場合でいえば、紀元前50年～60年、キケロがシシリア属州知事としての正当報酬として、250万セステルティウスを属州から巻き上げている（この金額は、キケロ自身が超豪華な生活を維持するのに必要な年収としている50万セステルティウスの数倍にあたる）。1世紀後には、プリニウスがその官職にともなう利権で年間20億セステルティウスをとりもどしている。だが、危険も大きかった。破産して債権者から政治的に見放されれば、破滅を意味した。それは元老院からの追放と、個人の財産の抵当権の喪失につながる。

この、土地、身分、典礼と政治のシステムから、不可避的な拡張主義が発生した。現にある土地の生産性を高めることにはほとんど注意が払われず（土地を資本投下と考えない）、金づくりはもっぱら政治的に、属州内の敗北者、被支配者を犠牲にして行われたのである。地元の人々からの略奪品、損害保険金、属州税、貸付金や様々な取り立てで金は貯えられていった。国庫も潤ったが、それ以上に金は個人の手に入った。まず第1の取り分は新貴族がとり、それからより弱小の元老院議員、騎士、兵士、さらにはローマ市民の平民まで順番におうじた割合で分け前をとっていったのである。また内戦によっても、政治的経済的富はうみだされた。

したがって、この時代のローマ経済で上層階級になった主たる役割は、広大な土地を取得することで土地所有を少数者に集中し、そこから得られる消費もまた同じ少数者に集中させたことである。その結果、ほとんど他のすべての人々を、程度の差はあれ貧困状態へと転落させた。だが、土地は現金をうみださないで、政治的地位の維持と強化のための資金は借入れざるをえず、それは拡張、征服、略奪、そして属州内からの取り立てによって埋め合わせられねばならなかった。上層階級は拡張主義の悪循環に陥ったのである。かれらのぜいたく品消費と出費は、あくことのない取得癖を不可避にした。

ローマ帝国の基本的経済論理についての以上の考察は、上層階級が他の形態での富の取得をおこなっていたことを排除するものではない。騎士階級、収税吏のなかの一部重要なメンバーたちは、国家との契約による徴税請負業務や、大規模な金貸し業をいとなんでいた。金の貸し先は主に属州内のコミュニティ住民で、同じ連中による国税徴収に苦しんでいる人達だった。これら上層階級の専門金貸し業者たちは、その活動を身分を汚すものとみなす同僚の上層階級にうとまれ、属州のなかの誰からもきらわれていた。だが、かれらが騎士階級全体を代表していたわけではない。上層階級のなかにも、われわれが「職業」

と呼べる仕事に従事しているものはいたが、それは収入を得るためではなかった。紀元前204年の法律は、法廷弁護士が依頼人から料金をとること、またはどんな口実であれ金銭を得るために法廷に出廷することを禁じていた。われわれがもっとも著名な法学者であるとみるキケロは、崇高で道徳的に高潔な職業のリストを提示したとき、法律家や弁護士はまったく含めなかった(注13)。彼はそれを職業とみなさなかったのである。ところが、彼が依頼人のために働いた時(上層階級だけを対象としたが)、キケロと依頼人との間には事実上の債務関係ができていた。この債務関係により、彼はその見返りとして依頼人に対し政治的サービスを求めることができたし、実際に求めたのである(注14)。

われわれが現代において、上層階級の仕事とみなすような他の職業も、ローマ時代の上層階級にとっては経済活動とはならなかった。ローマ時代の開業医の多くは奴隷か解放奴隷、あるいは外国人の仕事で(注15)、紀元2世紀までにはその仕事を無料でやるよう求められたのである。

最後にしつこく繰り返すが、これら上層階級ローマ人たちは生産や商業にかかわっていませんでしたということを強調しなければならない。プラントが記しているように、「著名な騎士で、商業を第一にするもの、あるいは小麦取り引きや個人的に海上交易にかかわっているようなものは一人もいなかった」のである(注16)。もし騎士がそうなら、元老院議員は言わずもがなである。

3. 身分と経済活動-下層階級の場合

上層階級の経済活動の基本的衝動と力は、外部世界に向けられていたことを述べてきた。収奪と金づくりの主たるみなもとは帰属州にあったのである。このことが全体として正しいとすれば、上層階級の経済活動とイタリア国内の下層階級の経済生活、経済活動との接点はわずかか、ほとんどないと想像することは可能だ。その場合事実上、上層階級と下層階級の、それぞれまったく異なった二つの経済システムがあったということになるだろう。が、これはあきらかに間違っている。上層階級の現金の必要性から、少なくともより低ランクの騎士階級のなかに専門の金貸し業が発生してきた過程はすでに見てきた。だがそれよりも、もし都市の「不労農場主」が農場の収穫物を消費できていたとするなら、誰かがそこで働いて収穫物を輸送していたはずだということになる。上層階級が教会典礼に従事する際には、そこで儀式を演じ、コーラスを歌い、浴場や道を造る人々がいなければならない。他の地の民衆を征服し、その土地を没収して税金を取り立てるには、誰かが戦争で

戦い、兵士を食わせ、誰かが税と債務の取立て管理をしなければならなかっただろう。したがって、すべての人々は、上層階級の経済基盤のうえに成立する、単一の経済システムに組み込まれていたのである。ここでわれわれは、こうした下層階級に少し目を向けなければならない。それはこの経済システムがパレスチナにあたえた影響を把握するためでもある。

奴隷の問題から始めてよいだろう。それは奴隷がローマ経済の不可欠の要素だったからでも、かれらがもっとも搾取されていたからでもなく、よく知られているとおりローマは奴隷制社会だったからである。しかし不思議なことに、ローマ帝国下のパレスチナのユダヤ人が奴隷化されたという、なんら重要な証拠はないのである。ユダヤ人が政治犯としてローマに連れてゆかれ、大衆のあざけりと円形劇場での闘いに供された証拠はたくさんある。にもかかわらず、ローマでの奴隷売買のためにユダヤ人が大規模に連行されたこともなければ、ローマ帝国のパレスチナ植民地人によってかれらが奴隷化されたことを示唆する資料もない。われわれの想像を裏切るような、この奴隷社会の振る舞いはなぜなのだろう？それは、ユダヤ人が奴隷に適していたかどうかといったことではなく、構造的な理由がそこにあったと考える。

紀元前3世紀ころまでには、ローマにおけるあらゆる形態の強制労働は、事実上、奴隷制にとってかわられていた。紀元3世紀には、奴隷制はコロヌスのシステム、つまり拘束小作人制度に事実上にとってかわられた。われわれが問題にしている時代には、システムとしての奴隷制はすでにすたれ始めていたのである。

ローマに何人の奴隷がいたかは、ひとびとの推測によって異なる。タキトゥスによれば、ネロ治世下の長官で自分の奴隷の一人に殺されたルキアス2世は、その市内の家だけで400人の奴隷を所有していた（注18）。ローマの墓地を見ても、解放奴隷の数は自由人よりも多い。叙情詩人のカトゥルスは文字どおりの極貧の人のことを「一人の奴隷も、貯金箱も持たない人」と表現している（注19）。南アフリカで、黒人使用人を少なくとも一人も持たないような白人がまったくまれであるように、この時代のローマにあっては、奴隷を持たない市民または裕福な非市民は例外であったろう。富を貯えた奴隷や、元奴隷でさえ、みずからの奴隷をかかえていた。

ローマの奴隷について語る時に銘記しなければならないことは、すべての奴隷が物として扱われ、暗くて汚れた牢のなかで足かせをはめられて半死半生の状態にあったわけでは決してないということだ。たしかに、主として農場では物として扱われる奴隷がいた。だが奴隷は自由民とならんで、あらゆる種類の市民の雇用関係のなかに存在していた。奴隷があきらかに独占状態にしていた職業もいくつかみられた。採鉱業がそうであり、家事サ

ービス業（料理人、執事、メイド、乳母、家庭教師、紡績工、織物工、仕立屋、会計係、管理者-そして王室においては下級の公務員）もそうだった。

奴隷が権力と富をそなえた地位につくこともできたし、そうした奴隷もいた。これは「個人財産」に関するローマ法典により、実現された。「個人財産」とは、その所有者が、他の私有財産権を持たない人間、たとえばお気に入りの奴隷などに、使用と管理をゆだねることのできる財産である。法的には、所有者はいつでもその返還を請求することができるが、実際には、譲りうけた奴隷はかなりの自由裁量権を持ち、その財産から生じる利益で自由民としての権利を買い取り、解放奴隷として商売をつづけたうえ、「個人財産」はみずからの後継者に継承したのである。この時代、都市の商業、金融、産業活動の多くの部分は、このようにして法的には奴隷でありながら、経済的には自営の職人、商店主、陶工、銅細工人、鉄器商人、質屋、金貸したちの手でいとなまれたのである。

これらエリート奴隷たちはまた、ユニークで貴重な権利を持っていた。もし彼らが解放されたり、主人たる市民から自由を買った場合には、ローマ市民権を手に入れることができたのである。こうしたことからすれば、いくつか発生した奴隷反乱において、これら都市のエリート奴隷たちが中立かまたは、積極的に奴隷主たちの側に立ったことは驚くにあたらない（注20）。そして奴隷の反乱はまれであった。暴動はたびたびあったが、それは税と債務をめぐる自由民の間で発生したのである（注21）。その理由についてはあとで述べるだろう。ここでは、奴隷たちがどんな屈辱に耐えねばならなかったとしても、税金と兵役を免除されていたことを銘記することが重要である。

古代世界では、賃金労働者というものは概念上も実際上も、まったくみられない。賃金労働者とは、継続的に雇用され、法的に自由で、賃金によって定期的な収入を得る人間のことをさしている。ギリシャ、ローマ時代においては、個人がその家族労働以上の労働力を必要とする時には、必ず労働を強制したのであり、そこで継続的な労働者を雇う場合、それはみな奴隷であった。これは特に大農場においてそうであった。また、製陶所、帝国造幣局、そして兵士用の武器と征服をつくる「工場」でも同じである。

だが、大規模な労働力は軍隊、道路建設や他の大規模公共事業、そして輸送、とくに都市への食料輸送においても求められた。奴隷は、軍隊をのぞくこれらすべてにかかわっていたが、「自由農民」と、下層市民、そして属州の地元住民たちもまた、これらの労働にかり出された。そうした強制労働者たちは、労働に対する手当をうけとってはいたが、しかしどんな意味でも契約労働者ではなかった。契約で働く自由な熟練職人もいたことはいた。要は、大規模な事業においては契約労働者、強制された「自由な」労働者、そして奴隷という三つの労働力が混在していたということである。

当然、このシステムが機能するためには、奴隷とならぶ労働力の予備軍がいたはずである。この予備軍の母体は「自由な」農民のなかにあった。これら独立農民たちに対する体系的搾取が、奴隷制衰退の原因であり、また、パレスチナ人たちが大量に奴隷化しなかった理由でもある。

典型的な小農の土地の広さがどれほどだったか、判断はむずかしい。エジプトでは小農の土地の平均的面積は1ないし2エーカーで、使用料、地代、税金込みで1年リースで借りているものもいたことがわかっている（注22）。紀元前2世紀、貧しいローマ市民たちはわずか3エーカー、大家族持ちの男は6エーカー標準の土地が与えられて、属州に入植していた（注23）。イタリア国内ではシーザーが、3人ないしそれ以上の子供をもつ退役軍人に対し6エーカーの区画を分け与えている（注24）。

これらのことから、標準的ないし必要な広さの小農の土地は、6エーカーまたはそれ以下とみられていたことがうかがい知れる。

このように狭い土地では、どう考えても小農の家族は大変な状況におかれていただろう。地所は息子たちへの相続により、もっと狭くならざるをえないのだ。自由民の子供を奴隷に売ることを禁じる法律があったなかで、こうした状況は高い幼児死亡率と幼児殺害をもたらした。

農民たちの生活はあきらかに生存の縁に立つものだった。都市の近くに土地を所有していたわずかなものをのぞいて（都市では通常、土地は上層階級に所有されていた）、小農民たちは現金を得るほどの収穫は得られなかった。かれらは自給するほかに、せいぜいよくても地元の農民市場で物を交換する程度だった。

だがローマでは多額の税金が土地に課せられた。現金で払わねばならない人頭税があり、くわえて帝国税または穀物税、そして土地に対する直接の税があった。1世紀末までには、帝国全土の総収穫量の3分の1から4分の1が税金にもっていかれたと見積もられている。

帝国税のうえにさらに、徴税請負人と役人による合法的な手当、非合法のゆすりがおこなわれ、かれらのふところに消えていった（徴税請け負い人は、国の雇用主から給料をもらうのではなく、業務の代償として徴税分の10%を上乗せ課税し、それを「客」から直接徴収することを許されていた）。

兵役と強制労働も小農を長期間にわたり農地からひきはなし、その結果土地は荒れて農民家族に大きな苦しみを与えた。

税金はもちろんすべての土地に課せられたが、実際に農地を耕す人々の上には不平等にのしかかった。奴隷に働かせている地主にも課税はされたが、かれらは税金逃れの専門家であった。1世紀までには犠牲の重みは農民たちの忍耐の限度をこえ、農地からの離脱が

大規模におこった。かれらはどこへ行ったのか？農民たちが選んだのは、イタリア本土を含む帝国全土で乞食になるか、無法者の一団や反乱グループに加わるか、あるいはみずからの地所を裕福な地主に売って、そこで小作農として働く道だった。こうして徐々に、しかし確実に自由農民は消滅に向かった。そして多くの土地で奴隷労働から拘束小作農（コロヌス）への転換がおきるなかで、かれらの自由な契約借地人としての地位は徐々に失われていった。3世紀末までには、これら拘束小作農が事実上、奴隷労働にとってかわった。地元でこのような拘束小作農が利用できるようになったので、上層階級にとってもはや苦勞して奴隷をかき集める必要はまったくなくなった。

拘束小作農があちこちでみられるようになる以前から、多くの大規模農場では契約小作農が、奴隷とならんで存在し、かつ奴隷制を侵食していた。初期のころは、財産や土地のない男、没落した小農、小農の息子で「あぶれた」ものたち、あるいは追放された小農たちが、こうした契約小作農（普通は5年契約）になった。資料によれば、大規模地主たちはたいてい、その地所を分割し、それらを多くの元農民の契約農に請け負わせ、契約農はかつて自分の土地でしていたと同じようにそこを耕作していたことが示されている。結局これらの契約農たちは、上層階級に賃貸料、使用料、税金を払った後ではなにも手許に残せず、急速に借金をかかえることになっていった。多くの契約農たちは、借金返済のためには契約期限がきれても引き続き長期にそこにとどまらざるをえず、こうして事実上、拘束小作農になっていったのである（注25）。

このような農民の地位の変化は、2世紀になっての住民層のなかの二つのカテゴリー、「高級民」と「下級民」の登場に反映されている。二つの層は、刑事裁判で異なった扱いをするよう法的に定められている。「下級民」は市民として、道徳上の罪や盗みをおかした場合、はり付けと火あぶりを含む過酷な刑をうけなければならなかった（注26）。こうした極刑は、税負担や債務をめぐる絶え間なく増大する市民の暴動や、下層階級の反乱への対抗手段として、ローマ貴族がつくったのである（注27）。だが、強調しなければならないのは、こうした「下級民」もまたローマ市民であって、奴隷ではないということである。

このようにして都市では皇帝と元老員による、根本的に寄生的な性格をもった寡頭政治が姿をあらわし始め、イタリアおよび属州の農村をしばりあげて、住民たちを困窮と債務、社会的無法状態へと容赦なく追いやっていった。

何度も述べたように、都市は基本的に寄生的な、消費のためのセンターであり、その主たる供給源は内陸地方および属州であった。だが同時に都市は文明の中心でもあり、水道をひかねばならず、公共の建物をつくり、一連の二次的職人（大工、大理石工など）や、手工業者（陶工、織物工、鉄器商、銅・銀細工職人、染料工、仕立職人）、そして商人を求

めていた。都市では奴隷、解放奴隷、自由民はみんなこうした第二次的経済活動に従事していた。だがきわめて明確なことは、わずかの例外をのぞいて、これらの経済セクターが生産していたのは地元の都市の市場と需要のためであって、輸出のためではなかったという点だ。言いかえれば、古代の都市はその富を手工業と輸出から得ていたのではない。富は、それほど大規模の土地所有と税金をとおして産みだされていたのである。

これら都市の職人集団もまた多くは自営業者で、みずからの生産物を売りもするし、固定給によって雇用契約されてもいた。大規模な公共事業であっても通常は小さな作業に分割されて、それを個々の職人たちが請け負っていた。これにより大儲けしたものもいたが、かれらの労働は根本的に臨時仕事だから、多くは収入を埋め合わせるために大規模奴隷農場で季節労働につかねばならなかった。

4、国家と経済

ローマ帝国政治経済の機能についての概括を終える前に、国家の役割について少し述べておかねばならない。

この時代の国家の、すなわち皇帝と元老員の権力が絶対的なものであったことは、一般的に認められている。国家の権能は、それが正当な根拠において行使されるかぎり、理論的には無制限であった。皇帝は当然にも帝国における唯一、最大の地主である。国家は戦争で没収した土地も所有した。この土地、つまり国有地は最安値で上層階級に貸与された。征服した土地はすべて、事実上国家の支配下におかれ、その処分権は国家が持っているものとみなされた。こうした仕組みのもとで、富裕なローマ人は属州の広大な地所を借りたり買い入れて、不在地主になった。しかし、ローマ人たちは属州の土地を独占せず、属州人がそのまま土地所有を続けるのを認め、また大土地所有者になる機会もあたえた。富裕な属州人たちはますます多く「パックスロマーナ＝ローマの平和」の恩恵を授かり、ローマ市民権をあたえられ、さらに少なからぬ者が元老院の地位さえ得ていった（注28）。帝国政体における属州化が進行していったのである。

上層階級にとって、征服戦争のもつ経済的意味は略奪であり土地であり、さらに帝国寡頭体制の中での政治的地位の確保にあった。国家にとっての征服の第一の意義は、官僚制を維持するための税金の確保にあった。すでに述べたように、属州は急速に国家歳入の主要な源泉になっていった。

だから、国境での外敵の驚異へのそなえが征服の多少の根拠であったにしても、ローマ

帝国の征服と拡張は、現代アメリカ帝国主義や19世紀の大英帝国の植民地主義のごとく、市場拡大のためになされたものではない。それはローマが輸出用の産業を持っていなかったという単純な理由による。ローマの拡張はなんといっても、課税地域を広げるために行われたのである。またローマは新鮮な食料、トウモロコシを輸入するためにいつも侵攻していたわけでもない。海上輸送をのぞいて、長距離の輸送にはけたはずれの費用がかかったのである。属州の地元生産物の主たる消費者は、駐留ローマ軍であった。

帝国が拡大するにつれて、巨大な官僚機構が形成された。官僚機構は、法律、裁判所、警察行政をとおり、本国外で商売した者たちの契約が遵守されるようにしたり、人と物の警護や、債務者に対する法的請求権の保証、ローマ人共同体が戦争の報復を免れるようにするといった業務をおこなった。

このように政治的経済システムの全体が、国家官僚機構のもとで機能していた。官僚機構のなかの地位を求めて、人々は激しく争った。国家の後ろ盾を得るためには、将来の見返りを期待した巨額の財産を投入し、合法的、非合法的に（規制をうけずに）役得を得ると、さらにそれを上回る資金を投入した。

5、ローマ帝国政治経済下のパレスチナ

ローマ帝国の存在が、ユダヤとガリラヤのユダヤ人にとって何であったかについては、「福音書の政治的背景」のなかでいくらか詳細に述べるつもりである。ここでは政治の歴史が形成された基盤としての、政治経済学的構造について序論部分を述べるにとどめたい。

ポンペイウスが紀元前63年にパレスチナをローマ帝国領にした時、すでにそこには、従前からの政治経済が明確に機能していたために、経済構造は複雑な概観を呈することになる。それはマルクス主義でいうところの伝統的な半アジア的生産様式と、ヘレニズム的都市国家の混在した政治経済であった。後者はアレキサンダー（紀元前323年没）の戦争の後で成長したもので、これによりパレスチナは、ギリシャ帝国の一部となったのである。つまり、比較的独立した二つの政治経済が並立して機能していたのである。

われわれは、パレスチナがいかにしてローマの政治経済に組み込まれたかを調べる前に、これら二つの体制について若干見ておく必要がある。それは、エルサレムを中心とするユダヤ人の伝統的半アジア的生産様式と、主としてガリラヤに位置し、デカポリスの名で知られる都市連合の形で存在していたヘレニズム的都市国家に対し、ローマの干渉は最低限

のものでしかなかったからである。侵攻してきたローマは、実際にはこれら二つの体制と
ならんで、第3の政治、経済体制を設立したのである（注29）。

三つのなかでは多分もっとも重要でない体制から論述を始めるのがいいだろう。つまり、
ギリシャの都市国家をまねて形成され、存在していた諸都市のそれである。これらガリラ
ヤの都市は、われわれにとってほとんど重要性をもたない。それは、イエスがその活動中、
あきらかにこれらのデカポリスの諸都市をさけていたこと、またイエスの活動中もその後
も、これらの都市がイエスの運動の重要な中心にまったくならなかったという消極的な理
由からである。イエスが活動している時にガリラヤを震撼させた激しい暴動と市民の反乱
は、69年から70年のユダヤ人戦争へと発展し、結局エルサレムの没落へといたるが、
この時もこれらある種の独立都市は、その運動に決して加わらなかった。この問題につ
いてのヨセフスの言葉を信じるとすれば、ガリラヤのユダヤ人たち、とくにガリラヤ農民た
ちは、これら都市の住人たちをガリラヤ人とよぶことを拒否した。ヨセフスのいうガリラ
ヤ人とは、あきらかに、彼がつかの間の反乱長官として君臨した時に、彼を支持してくれ
た地方農民のことをさしているのである。

デカポリスの都市住民は、社会的にも心理的にも、また経済、思想、政治の面でも他と
は区別された集団で、人種的にさえ別個の集団であった。都市の多数住民はユダヤ人では
なく、多くはギリシャ人、フェニキア人、そしてシリア人だったのである。

これらの諸都市は、ダマスカスからガリラヤをとおり、シリア、フェニキアの港、プト
レマイスにいたる大交易路にそって位置していた。そのおかげでこれらの都市は、行き来
する隊商から通行料、関税の形でもうけを得ていた。交易隊の通過はまた、自営のホテル
経営者、商店主、地元の職人たちにももうけをもたらした。だが、ダマスカスとプトレマ
イス間の交易の規模は、それ自体ではこれら小都市の経済基盤を支えるほどに十分なもの
ではなく、隊商の通過による通行料と関税は、市財政および地元職人、商人、金融業者の
乏しい収入をおぎなう以上のもではなかった。ローマとギリシャの都市国歌と同様、デ
カポリスの諸都市は、後背地域に寄生する存在だった。これら外縁地域は一つの区を構成
し、都市の一部とみなされていた。ユダヤよりずっと肥沃なガリラヤは、はるかに耕作に
適した土地を持ち、小麦の生産で有名である。都市の上層階級の大部分は、債務不履行に
対する抵当差し押さえ、没収、買収といういつもの手法で広大な土地の不在地主になり、
それらの土地は主として小作農が耕作した。収集された資料によれば、ガリラヤでは奴隷
を使用した地所は多くなかったようである。

ギリシャに比されるごとく、デカポリスの諸都市は税金を免除されており、ローマに比
されるごとく、それらは生産と輸出ではなく大量消費の中心であり、支配階級が職業から

の自由を謳歌するところだった。都市の消費は広大な地方の土地によって、その生産を支えられていた。そしてはでな消費を支えていたのは、物欲ではなくて政治的特権であり、それは都市の共同体のために行った公共事業によって得られる。このように支配エリートは、都市にとっては政治的、経済的中核であった。かれらの生活様式のために内陸地方は消耗した。と同時に、職人、石工、鉄器商、織物工、パン屋などの二次的雇用が産み出されもした。ローマでと同じように、これらの二次経済活動は下層階級によってになわれた。かれらは土地をもたないがゆえに長老評議会からは除外された、本質的に自営の臨時労働者である。永続的に雇用される賃金労働者はいなかった。だが、かれらの生活は完全に支配体制に依存していたので、ガリラヤの農民反乱に対してはほとんど支持をせず、この時代の市民反乱においても支配者の側につきがちだった。

これらの諸都市は、エルサレムの神殿税を免除されていたのとまったく同じように、ローマが侵攻して支配していた時にも帝国税を免除された。土地税とトウモロコシ税だけは徴収されたが、都市の不労農場主たちはこれらの税を、実際に耕作にたずさわっていた人たち、つまり小作農民たちにかぶせたのである。いまや農民は不在地主（多くはローマ支配下で上層階級になり、ローマに住んでいる連中）に対する小作料負担のみならず、神殿税、そして帝国から小作人当人に賦課された土地、生産、公共税まで背負うことになった。ヨセフスによれば、疲弊と困窮、つもる債務と滞納税金にみまわれた小作農民たちは、ガリラヤの政治的騒乱の中心であった。かれらのなかからユダヤ民族主義の熱心党の運動がうまれた。ローマの小作農たちと同様、ガリラヤの小作農民は、コロヌス＝拘束小作農になってすべての地位と見せかけの自由をも失うか、あるいは法の手を逃れて土地を棄て、ガリラヤ高原の反乱者たちに身を投じるかの道突きつけられたのである。

ガリラヤの諸都市におけるこうした状況の一方で、エルサレムの宮殿と神殿群を中心する政治経済が存在していた。

エルサレムも、ローマやデカポリス諸都市と同じく消費中心地であり、輸入に寄生して生きていた。輸出用の生産もせず、ましてや農作物の輸入のため経済的自助努力などなにもしなかった。だが、エルサレムの経済ロジックは、ローマやデカポリスとは基本的に異なる。

エルサレムの中心であり、これを支えていたのは神殿と祭司の階層体制である。ヘブライの預言者エリミヤによれば、エルサレムには世界のありとあらゆるユダヤ人から莫大な金が流れ込んだ。その金は、寄進、重加算という名目で法的に課せられた税金、あらゆる収穫と所得に対する十分の一税、誓いの実行、木材の配達、いけにえ動物の取り引き、などなどの名目で流れ込んだ。

この資金は上級祭司たちによって管理され、その内の3名が役人スタッフをかかえた最高管理官となっていた。祭司貴族たちはこれらの神殿財産を管理し、そこから定期的所得を得ていたけれど、法的にはその資金はかれらのものではなく、したがって祭司たちは「公的財政」をやりくりしているものとされた。

上級祭司の家柄（ローマ時代、ほとんどの上級祭司は4つの家の出身だった）は非常に裕福で、おそらく地主でもあったろう。さらに、神殿敷地内でいけにえの動物を売買する特権は、そのなかのただ一家、おそらくアンナス家が所有していた。

くわえて神殿は、巡礼団から莫大な収入をあげるとともに、大祝際に訪れる巡礼にかかわる多くの二次的商売を産みだしていた。エレミヤの概算では、エルサレムの固定人口は3千人を越えなかったのに、過ぎこしの祝際の時には6万人に達した（注30）。供物の販売人、宿屋、職人、商店主、金貸しや両替といった人たちはこの巡礼団によって支えられていた。

ユダヤ人、とくにパレスチナの全ユダヤ人は、神殿によってエルサレムを中心とする単一の経済システムに組み込まれていた。この体制の基礎は本質的に宗教にあるから、その調整と管理は祭司階級がになっおり、したがって祭司たちは宗教上、政治上、刑事上の管理権をもにぎっていたのである。

ローマ時代のエルサレムにおいては、全神殿機構の（つまりはユダヤとガリラヤ全地域の政治的、宗教的、経済体制の）統制権限は大サンヘドリン＝最高院にあった。最高院は「上級祭司、長老、記録官（学者）」からなる71名のメンバーで構成された。

「上級祭司」は永久的な神殿官僚を形成する。かれらのトップは大祭司で、最高院の議長をつとめる。バビロニア王朝の崩壊とバビロン捕囚からの生還以来、大祭司の宗教的権能は、同時に政治的権能の基礎でもあった。もともとは大祭司は終身制で世襲制だったが、ローマ支配時代になってローマの高級官僚は大祭司をきまぐれに任命し、解任した。この単純な政策は効果をあらわし、大祭司の地位はそのすべての利権とともにローマ帝国風の身分へと変質していき、その家族たちは皇帝のご機嫌とりレースにかりたてられていった。

大祭司の下には、「神殿長官」という名の上級祭司がいて、ユダヤ教団の最高管理者とともに、警察の最高幹部もかねていた。したがって彼が神殿の政治機構における抑圧機関の責任者であり、その権力は主としてレビ人で組織された警察をとおして行使された。

そのほかに、神殿の鍵を管理し、入場を統制する役目の7人の上級祭司がいた。

終局的な祭司の特質は神殿の公的財産の管理者としてのそれであるが、このことについてはすでに述べた。

以上のすべての人々が最高院に議席をおいていた。そしてその下に神殿財政でまかなわ

れる多数の役人、祭司、レビ人、平信徒がいて、これらが神殿と、さらには広くユダヤにおける日常の宗教や政治、警察、財政、教団機構にかかわる仕事についていた。

長老というのはエルサレムの平信徒貴族たちの幹部で、最高院に議席をもっていた。これらの貴族は、肥沃なヨルダン川ぞいの土地にその主たる財産をもっていた。彼らは、みずからの土地を主として小作農に耕作させる「不労農場主」だった。

これら平信徒貴族たちの政治的依存性には、ローマによる支配も寄与している。バロンが証明しているように、貴族たちは所有する土地に不安を感じていた（注3 1）。手続き的にはすべての土地はローマ帝国の財産に属するのである。彼らは安心を得るために、ローマの権力者とその子分たちの政治的庇護をかちとるための贈り物として、再三にわたる任意の土地徴用に応じていた。

最高院を構成する最後の集団は、「記録官」である。記録官は年齢40歳と定められ、永年にわたり学問を追求した者たちで、宗教上、刑事上の問題で独立の決定権をもっていた。かれらは宗教、民事、刑事の各裁判の裁判官の資格をもっていた。

最高院は、ローマ時代、厳格なユダヤ国家機構における中心であった。その経済的基盤は、完全に神殿教団とその宗教上の正当権力にあった。エルサレム政体は、ローマ帝国に大祭司と長老をコントロールされ、あきらかに片翼をもぎとられていたものの、この時代をつうじて機能し続けた。アルケラス（ヘロデ大王の子）の治世の後、このユダヤ神殿国家機構の独立性をたかめるため、ローマ人行政長官はカエザリアに置かれ、エルサレムには大祝祭の時のみ訪れた。エルサレムに永続的に駐屯していたのはローマ歩兵の一隊だけだった。

パレスチナのユダヤ国家が機能し続けていたという事実は、ローマ帝国の拡張の背後にある動機が、イデオロギー的なものではなく経済的なものだったという私の主張をうらづける。税を取り、属州内の上層階級ローマ人の利益を保護するという目的が達成されるかぎり、ローマが属州人の支配層を疎んじる理由はなにもなかった。帝国が欲しかったのは税金であって、臣民ではなかった。

ヘロデとアルケラスの時代にはとくに、エルサレムの神殿経済とともに宮殿における経済活動がさかんだった。その中心は世俗ユダヤ人の特権階級地主で、広大な土地を小作させて富を得ていた。土地から得た豊富な財産は、都市の公共事業に支出されたり、またはローマ皇帝と貴族の有力メンバーの政治的庇護を得るための高価な贈答品についやされた。

エルサレムの神殿と宮殿の複合体制は、自営の臨時職人、商人、染料工、両替商、織物職人などといった、都市における日常の二次的経済活動に活気をあたえた。エルサレムでは実に巨額の金が、神殿（紀元20年に始まり62年から64年に完成した再建工事）や、

宮殿、水道などにつぎ込まれていたのである。

エルサレムの神殿教団が、イデオロギーと宗教の面でパレスチナのユダヤ人につくしたことはうたがない。だが経済の面でみれば、それは地方農村の人々になんらの利益も与えなかった。神殿の経済を支えたのはかれら村落住民たちである。だが、にもかかわらず市民の反乱は教団自体に対する宗教的な反乱とはならなかった。エッセネ派やパリサイ派による宗教的な改革運動はたしかにあったが、それらは教団の改革をめざすもので、その転覆を企図したものではなかった。

ユダヤ人の多数を占めていたのは、散在する農村に住む小農民たちである。ほとんどは自給自足で、食料、衣服、農機具、瓶などの家財道具を自足していた。これらの農村の労働形態は最小限の種類のものしかなく、織物、染料、大工などの自営職人がいるだけだった。村は市場の中心ではなくて、むしろ小農の物々交換の場といえた。農村周辺の土地は個人が耕作し、相続もされていたが、理論上は「共有地」とされていた。

農村を中心にした小農たちの狭い地所とともに、とくにガリラヤには広大な土地もあった。そこを耕作していたのは農繁期を中心とする日雇い労働者で、通常、その実体は農村の小農、または不在地主の地所で働く小作農たちであった。

農村には、小農家族の指導部としての長老評議会があり、共同体の行事を取仕切ったり、民事や刑事紛争の裁判をおこなうために招集された。

このように、地方の住人を構成していたのは小農の村落共同体で、人々は自給自足の農民でもあり、臨時的、季節的、不安定労働者でもあった。かれらは小さな交換コミュニティを形成していたが、しかしすべては神殿税、寄進、誓い、十分の一税、巡礼をとおして、エルサレムにしばりつけられていたのである。人々は、神殿経済にともなうこの負担を、宗教心によって受容していた。

経済体制のなかのこうした層に対し、ローマの支配は破壊的な影響をあたえた。だが、決してローマは人々の宗教生活を圧迫したり、かき乱したのではない。あるいはユダヤ教の戒律の重大な変更をせまったのでもなかった。宗教や法律は引き続き、厳格なユダヤ最高院が律していた。破壊的影響をあたえたのは、神殿税と宗教義務のその上にかぶせられた、ローマ帝国税であった。

エレミヤの試算によると、ユダヤだけで年間600タレントの税金を課せられていた。これは、一日の農作業賃が1デナリウスとされていた時代、600万デナリウスに相当する。ところで神殿と宮廷は税金を免除されている。つまり、くり返しになるが、これらの税負担は小農と小作農のうえにかぶせられていたのである。

税金の金額がけたはずれに高かっただけではない。税の形態と、徴収方法もまた問題で

あった。税金は構成するのは、おもに「租税」（ローマ帝国人口、資産調査にもとづく人頭税と、土地税）、「年間収穫税」（駐屯兵への毎年の食料提供と、公共事業への強制労働）、そして「国民税」（悪名高い徴税請け負い人と超税吏が徴収する間接税、賦課金）であった。徴税請け負い人が、「お客」から合法的な費用と不当なうわまへの両方をまきあげていたことはすでに見てきた。これを払えない多くの小農と小作農は、土地とりあげをまぬがれるために借金をしようとした。その結果、かれらは金貸しの、ついで債権取り立て人の餌食となり、最後には抵当の土地をとりあげられて債務者刑務所に送られた。急速に物質的生活条件をうしなつた小農たちは、生きるために、前述したとおり土地と住居を捨てて、大量に遊民化の道をえらんだ。

この時代のパレスチナの経済構造の最後の要素は、当然ながらローマ帝国自身であった。この点については、すでに何度もふれてきている。

ローマは、ユダヤの直接統治をした時、サマリアの港町、カエサリアに行政長官、官僚団、駐屯兵をおいた。官僚たちはエルサレム自体に対しは、そこで税金と債権の記録、保存、徴収のための作業をする以外、ほとんど介入しなかった。債権管理事務所は宮殿の構内におかれていた。巡礼におとずれる債務者を見つけられるから、エルサレムのこの場所に事務所をおくのは官僚たちに好都合だったのだ。だがそのため、大きな祝祭の時に発生する市民反乱では、宮殿が第一のターゲットにされた。

それ以外の人々にとっては、カエサリアはパレスチナの地に立つきわめてローマ風の都市であり、ローマの官僚と軍隊と、普通の種類の商人、職人、金貸し、徴税請け負い人たちが住んでいた。この町も他の都市と同じように、パレスチナの農業地帯に寄生する存在であった。だがこの主たる消費者は、通常は3000人から4000人の駐屯兵たちで、その多くはシリア人とフェニキア人の出身であった。

小農と小作農からとりあげられた貢ぎ物、略奪品、税金、課金は、カエサリアを經由してローマへと運ばれたのである。

結論

以上のきわめておおざっぱな構造描写から、多くの点があきらかになる。

1、ローマの拡張主義的政策は、その政治経済構造それ自体から派生した。その拡張主義の論理は、ローマの生産物の市場を求めてのものでは決してなかった。（販売ではなく）取得の論理である。財貨は、拡大する周辺部から主としてローマへ、その各種の都市中心部

へと向かって動いた。収奪の主たる形態は、土地の取得と税金であった。

2、イタリアの（自由）小作農たち自身が、上層階級の取得熱の手をのがれられず、借金のために土地に拘束された小作農へと転落していったので、これら上層階級は安価な強制労働力の資源を得ることになり、その結果、奴隷の輸入は衰退し、パレスチナなど属州の奴隷化は不必要になっていった。

3、最初にギリシャが、ついでローマがパレスチナを帝国領にした時、ガリラヤとユダヤの地方住民は、乏しい資源から四重に搾取された。

第一は、ユダヤ人にとってはイデオロギー的に受容可能な、エルサレム神殿およびその祭礼、管理スタッフに対する課金、税金である。

二番目は、小作農がローマやデカポリス、エルサレムに住む不在地主に払う契約小作料である。

三番目は、ローマ帝国に支払う税金で、徴税請け負い人が徴収し、警察、裁判所、債務者刑務所をつかって強制された。

四番目は帝国の公共事業への強制労働である。そのために手入れができなくなった土地は荒れ放題になって、農民たちはますます借金と税金を払えなくなっていった。

これらすべてのことから、多くの農民が土地を放棄し、様々な形のホームレスとなり、遊民化の道をえらんでいった。

4、パレスチナの都市住民たちは、こうした転落の悪循環とは無関係だった。祭司と平信徒の支配層たちが失ったのは、わずかな独立の方途だけだった。だが、都市の技工、職人、商人などは、ローマ風の大量消費と公共事業への支出のおかで経済的チャンスが拡大したことはたしかである。

5、ローマ帝国による課税システムは、一つの重要な宗教的影響をあたえた。ローマにしぼりとられるため、多くのユダヤ人は神殿への課金と税金を払いつづけることができなかった。そのためますます多くの人々が神殿教団から遠のくこととなった。このことは台頭してきたシナゴグとパリサイ派の運動にはずみをあたえた。パリサイ派は、犠牲を強いる教団にかわって、律法と高潔さに基礎をおいたユダヤ主義を提唱した。また彼らは終末論的な世界観と夢と希望を生き返らせた。その希望は天界の救世主たる大祭司が司る来世的、超越的なエルサレムと神殿に基礎をおいたものだった。この敬謙な新興宗派にもっとも共鳴したのは、世俗的な神殿への義務を十分になしうる人たちではなく、あきらかに、増大する難民の集団であった。

6、このユダヤ難民の群れが、あちこちに出没するより超越的な宗教運動の温床であったとするなら、それはまた物乞い、無法者、窃盗、そして革命運動集団の温床でもあったの

だ。

以上、わたしのこころみた構造描写が、パレスチナで進行していたことを整理し、理解する一助となれば幸いである。

われわれの目的にとってもっとも重要な事は、ガード・テイセンが述べているように、次のことである。福音書のかたちでイエスを語り伝えた人々によれば、イエスの大きな活動は、(エルサレムをのぞいて) 都市よりも農村に限られていたことがわかる。また、この著者たちは、みずからを住居のない遊民としている(注32)。いいかえれば、かれらの語るイエスとは、ローマ帝国政治経済の搾取の先端にいた小農、難民たちの恐怖、希望、挫折と生活条件のなかからその運動を打ち立てたにちがいない、一人の民衆指導者なのである。そして、エルサレムを含め、都市には重要な信奉者はほとんど、あるいはまったくいなかったと明確に述べている。